2018年7月
聖句随想・折々の言（ことば）

「 聖書味読 味わいのある生き方へ 」

牧師　森　言一郎

イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

（ヨハネによる福音書
21章12節～14節）

聖書はわたしたちの五感に訴えてくることがあります。国語辞典を引いてみると「五感」とは【目・耳・舌・鼻・皮膚を通して生じる五つ

の感覚。視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚。また、人間の感覚の総称としてもいう。】（『スーパー大辞林』より）とあります。

ヨハネによる福音書21章のはじめは、甦りのイエスさまがガリラヤ湖畔にお姿を顕された場面です。わたしは、聖書の中でも、とりわけ五感に訴えてくる情報に満ちているのを感じるのです。しばらくの間、ご一緒に黙想を深めましょう。

＊

目に入ってくるのはどんな風景でしょう。湖畔の朝方の景色が見えます。ペトロたちの舟の他にも、漁に出た人が居たかも知れません。夜通し漁を続けていた弟子たちの疲労の色は濃かったはずです。暗さが際立ちます。

一方で、明け方のガリラヤ湖の闇に光が射してくるのを感じます。もちろん、イエスさまの登場が重なるからこそ、光に満ちた湖畔の情景が立ち上がって来るのです。聖書の一番初めの書、創世記1

章の【光あれ】というみ言葉を思い起こします。

＊

耳に届くのはどんな音でしょう。魚がとれないのですから舟を移動しては網を投げる。また移動するということが続いていたかも知れません。ギーコー、ギーコーと櫓をこぐ音、風の音、そして波の音も聞こえます。

「そーらっぁ、今度こそ」というような形で網が湖に投げ込まれる。しばらくの間を置いて、7 人の弟子たちのため息が大きくなり、「ちぇっ」という舌打ちまで聞こえて来るかのようです。

そんな中で、岸辺から男の声が聞こえました。空気が澄んでいますから岸辺から 90 ㍍離れていても、まるで直球が投げられたかのように、ポーンと【子たちよ、何か食べるものがあるか】という、その声が舟の上の弟子たちに届きます。彼らはそれが誰だかわかりません。迷惑な声掛けだったでしょう。イエスさまのお声でした。

＊

臭いだって、当然いろいろとしていたことでしょう。汗くさい漁師たちの体臭だってあったに違いない。おまけに漁舟ですから魚の生臭さもあったはずです。

岸辺では炭火が起こされて、パンと魚が焼かれる臭いがします。夜通し働き続けて腹ペコの弟子たち。お腹がグーグーと鳴り出してもおかしくありません。おそらく干物がイエスさまの手によって準備されていたと思われますが、どんな魚だったのか。

＊

味わうということも出てきます。炭火焼きのパンとはあまり耳にしたことがありませんが、現代では考えられないような仕方で焼かれるパンがあるのです。トースターみたいに上品には焼けないでしょう。焦げた臭いもします。

何よりも、イエスさまと一緒に朝ご飯を頂く、しかも、まったく思いがけない平安が与えられる朝となったのです。弟子たちにとって忘れがたい味わい深い朝食となりました。

＊

触覚という点ではどうでしょう。ヨハネによる福音書20章の終わりには、ディディモと呼ばれるトマスが【あの方の手に釘の跡を見、この指を釘穴にいれてみなければ、わたしは決して信じない。】と断言していました。

「触らないで信じることなんて出来るもんか」と言い切ったトマスですが、彼は、甦りのイエスさまに実際には触れていないのに、様々な形で主イエス・キリストに触れている朝を迎えているのです。

生真面目なトマス。彼はやがて新約聖書には入らなかった『トマスによる福音書』を記す人となり

ました。このガリラヤ湖半での出会いの場面がおさめられているのか、調べてみたいと思います。

＊

聖書を味読すること。本来それはとても楽しいものです。そのための感性をわたしたちは豊かにしたいと願います。

妙な言い方になるかも知れませんが、わたしたちは、聖書をより深く味わい楽しみ、よいものをたくさん感じるためにも、五感が鋭くなっていくことも必要なのです。

日頃からよい音楽に触れ、美しいことばを知り、旬の野菜や魚のおいしさを味わうこと、春夏秋冬、その季節の野の花や空の美しさに触れることも、実は、聖書の世界、神の国を豊かに感じるために大事なことです。

＊

文芸評論家であり、詩人にして、薬草商もなさっている若松英輔さんが、2016 年の夏目漱石の生誕 150 年を記念しての随筆に次のような言葉を記されています。嬉しいことに若松さんはクリスチャンです。

【『こころ』は、漱石の作品の中で、もっともよく読まれたものだが、多く読まれるということは必ずしも深く読まれることとは限らない。あらすじが広く語られ始めると、物語はむしろ、本当の姿が隠されていくことがある。めずらしい現象ではない。

私たちも、人の噂を安易に信じるような人に、内心の思いを語ったりはしないだろう。書物も同じである。

古典は、長く付き合ってくれる読者の出現を待っている。読むことを通じて、それぞれの人間が『こころ』を胸のうちに産みだすこと、それが文学の経験にほかならない。】(『若松栄輔エッセイ集 悲しみの秘義』・「文学の経験」より　ナナロク社

2015 年）

＊

わたしたちは『聖書』のあらすじを追いかけるに留まっていないか。上っ面だけしか味わっていないのではないか。否、少しも味わえていないことがあまりに多過ぎはしないだろうか。若松栄輔さんによる夏目漱石の『こころ』を巡る随想の言葉に触れると、いささか心配になってきます。

時代と共に読み継がれてきたのが『聖書』です。何よりも『聖書』は神の言葉としての包容力をもってわたしたちを迎え導いてくれます。お勉強でもない。あらすじを知るためでもない。時代の荒波を乗り越え、生きることの喜びを見いだせる源泉が『聖書』であるとするならば‥‥‥。

わたしたちは五感をもって『聖書』を味わい、イエスさまと出会うための気の利いた遊び心も伴うような鍛錬を、日頃から重ねる努力も必要なので

はないだろうか。ガリラヤ湖畔に顕れた復活のイエスさまと弟子たちの姿を通して、わたしたちは一本の道を見いだせる。そう感じているのです。end